市長独言 No.114 …種子中グラウンド完成

種子島中学校グラウンドの改修終了後初めての体育大会が9月に開かれました。直近の雨天続きでコンディションが心配されたものの、排水対策の効果があって、きわめて良好な状況で終えることができました。

改修前は、雨で表土が流されるとガラス片などが露出することがあり、戦時中の空襲で被災した校舎の残骸（ざんがい）かと思われます。生徒らの安全確保のために整備が急がれ、2023（令和5）年に実施設計に着手。翌年、土砂を掘削して敷地造成にかかり、排水設備（側溝、暗渠（あんきょ）排水管）を整え、さらに球技の際にボールが周辺の住宅地に飛び出ないように防球ネット（高さ10メートル、全長380メートル、柱43本）をめぐらせました。バックネットの腰壁やネット裏の観覧席が完成したのは今年7月。足かけ4年にわたる事業（計約3億2千万円）となりました。

種子島中は2009（平成21）年、市内の6中学校が統合し新設開校しています。その3年前に種子島実業高等学校と種子島高等学校の2校を再編し新設種子島高校が旧種子島実業高校の敷地に開校。その後、旧種子島高校の敷地に種子島中学校がスタートし、体育大会は第18回を数えます。

さかのぼれば1926（大正15）年に設立された県立第一鹿児島中学校分校が29（昭和4）年、県立種子島中学校となりました。45（昭和20）年3月に西之表に空襲があり、死者（軍人3、市民3）、行方不明（軍人4、市民13）、住家全焼62棟、非住家全焼13棟の大被災。このため全学校が1年間授業停止となり、4月に校舎を日本軍駐屯部隊が兵舎として使用を始めた4日後、「空襲により、種子島中学校全焼し、軍人に負傷四、死者二名を出す」と記録されています。（「西之表市年表」）

戦後81年、ようやく戦争の痕跡を消し去った校庭を走り、跳ぶ生徒たちの姿をまぶしく眺めました。



▲防球ネットに囲まれたグラウンド